若い世代とともに、地域の農業を
未来へつないでいくことに
大きな喜びを感じています。



農業に懸ける情熱



1 就農したきっかけ

幼いころから両親が農業を営む姿を見て育ち、長男として「いずれ農業を継ぐだろう」と自然に思うようになりました。中学卒業後は、農業を学ぶため岩見沢農業高等学校へ進学しました。成長するにつれて他の進路と迷う時期もありましたが、その時両親が「継がないならいずれ農家を辞めるかもしれない」と言っているのを耳にしました。そこで「子どものころから間近に見てきた農業をここで絶やすくらいなら、自分がやろう」と決意し、高校を卒業後、すぐに就農しました。

2 就農当時のこと

幼いころは農作業を手伝う機会があまりなかったため、本格的に農業に携わったのは就農後が初めてでした。農業に対する抵抗はなかったものの、実際に作業してみるとわからないことも多く、苦労の連続でした。

その中で、地域の農家さんの作業の手伝いや、JAの大豆施設でのアルバイトに携わりました。さまざまな現場を経験したことで実戦的な知識が身についただけでなく、地域の方々とのつながりが一気に広がりました。両親をはじめ、現場で出会った地域の先輩方に温かく教えていただいたおかげで、着実に農業に慣れていくことができました。

3 農業法人の設立と次世代への継承

23歳のころ、幌達布地区の農家で構成される農業法人「株式会社タップファクトリー」が設立され、共同経営を開始しました。就農当時は地域に共同で作業をする拠点がなく、設立を機に機械を共同で所有・利用する体制が生まれ、地域の同業者と一緒に作業を進める場ができたことは、私にとって大きな支えとなりました。当時、私は構成員の中で最年少で経験も浅かったのですが、先輩農家の意見や知識を吸収しながら作業を進めることで、さまざまな学びを得ることができました。何より、仲間と声を掛け合いながら楽しく農作業に励めたことが、自分にとって一番の支えでした。

現在では、構成員の息子さんが新たに加入するなど、若い世代も増えてきました。今度は私が教えてもらった知識や経験を、次世代へ伝え育てていく番です。若い世代とともに、地域の農業を未来へつないでいくことに大きな喜びを感じています。



4 仕事をするうえで大切にしていること

日頃から仕事を溜め込まず、気づいた時にすぐ行動することを意識しています。近年は干ばつや急な豪雨が増え、管理作業などの心配ごとが増加しています。天候に左右される場面が多いからこそ、後回しにせず素早く動くことが不可欠です。こうした経験を積む中で、悪天候にも対応できる知識と行動力を身につけられたと感じています。天候に振り回される大変さはありますが、努力の末に育てた作物が無事に収穫できた時の喜びは何にも代えがたいです。

5 理想の農家像

4年前から、キャベツ部会の部会長を務めています。部会長になってからはキャベツの栽培面積も拡大し、より力を入れて栽培に取り組むようになりました。部会長としての責任も増えましたが、今後も部会全体で「キャベツの栽培面積をさらに増やしたい」という思いを胸に、その魅力を積極的に発信していき、少しでも栽培面積が広がっていけば嬉しいです。

今後もより良い作物を作れるよう努めるのはもちろんのこと、農業は体力仕事でもあるため、日頃の健康管理にも気を配り、10年後、20年後も笑顔で農作業を続けていきたいです。

人物 memo

岩見沢市北村幌達布
山本（やまもと） 善弘（よしひろ） さん（42歳）

妻の美羽さん、父の一昭さん、母のヨシ子さんの家族4人で約16haの農地に水稲、小麦、大豆、キャベツ、ハクサイを栽培。幼いころから農業を身近に感じながら育ち、高校卒業後はすぐに就農しました。

現在は地域の農業法人で仲間と協力しながら次世代の育成に注力。キャベツ部会の部会長として栽培面積の拡大や魅力発信に励んでいます。